

# がん哲学外来市民学会 ニュースレター

Cancer Philosophy Clinic Association for the People

## 創刊号

2012年10月20日

発行者

がん哲学外来市民学会  
〒385-0046 長野県佐久市前山321-3  
がん哲学外来研修センター  
電話0267-63-5369 FAX0267-63-5389  
E-mail:info.shimingakkai@gmail.com  
http://www.shimingakkai.org/

# がん哲学外来市民学会 第一回大会報告

平成24年9月23日

## 第一回「がん哲学外来市民学会」を終えて 「Union is Power」



順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授  
第一回大会長 樋野 興夫

記念すべき第一回「がん哲学外来市民学会」(テーマ「医療の隙間を埋める」がん哲学外来の使命)を無事終えた。実行委員長の「開会挨拶」「長野県知事」の「来賓挨拶」に始まり、私は、会長講演「客体的隣人観」から「主体的隣人観」へを語った。ワークショップ「各地のがん哲学外来報告」では、福島県立医大、岩手県立中央病院、福井済生会病院、佐久、横浜、国立病院機構沼田病院から充実した報告がなされた。堅実な拡がりを実感した。

久市長の「メディカル・タウン」の話は、「若月俊一」の精神に相応しい「医療の共同体」として、大変情熱的・魅惑的であった。元NHKアナウンサーで軽井沢朗読館長・青木裕子氏の童話の「朗読」は、大変心にしみた。それに続いての柳田邦男氏の特別講演「人は物語を生きる」のちと響きあう言葉」では、人間の深さを痛感した。「がん哲学外来は解放区」であるとの暖かいお言葉には、今後の方向性を与えられた思いである。佐久市立国保浅間総合病院院長の心優しい「開会挨拶」で幕を閉じた。まさに、「新渡戸稲造生誕150周年記念事業」に相応しい、スタッフ一同の「Union is Power」の成果であろう。



がん哲学外来市民学会第1回大会長講演

供らを集めて無料の「遠友夜学校」(1894-1944)を開設した。「新渡戸稲造校長」が生徒に教えた基本姿勢は、  
(1)「生活環境や言葉が違っても心が通えば友達であり、心の通じ合う人と出会うことが人間の一番の楽しみである」  
(2)「学問より実行」  
(3)「何人にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛を持って」(リンカーン)  
を旨としたと言われている。まさに、「がん哲学外来」の原点であり、柳田邦男氏の「解放区」は、ここに具象化されよう。そして、その作法は「奥ゆかしさは最も無駄のない立居振舞いである」の言葉が甦る。ここに「がん哲学外来コーディネーター」の資質のイメージが浮かぶ。



県内外から大勢の方が集まる



特別講演に柳田邦男氏を迎えて

## がん哲学外来市民学会 第一回大会を終えて



第一回大会実行委員長  
佐久総合病院地域ケア科

### 北澤 彰浩

平成23年12月18日のがん哲学外来コーデイネーター養成講座の中で「がん哲学外来市民学会」を設立するということが決定され佐久宣言が行われました。第一回の記念大会はなんと佐久で開催するというのも決まりました。しかも、実行委員長を私が務めさせていただくことに。

その後しばらくの間は本当に学会を開催できるのか、開催したとして市民学会にわざわざお金を払ってまで一般市民の方が参加してくださるのか等々不安はいつも尽きませんでした。ただ、私の周りには「そんな不安を気にしていたら何も始まらないし進まないわよ」と言わんばかりの表情や態度で黙々と準備を進めてくださる素敵な仲間である実行委員の皆様（多くは一般市民の方）がいつも温かいオーラをだしながら支えていて下さいました。そのお陰を持ちまして、この度がん哲学外来市

民学会第一回大会を無事開催し盛況のうちに終えることが出来ました。

内容は本当に充実しており講演もワークショップ（各地のがん哲学外来報告）もシンポジウム（医療の隙間を埋める〜がん哲学外来の使命〜）も朗読も、どれをとっても心に残る大変感動的なものでした。

大会を通じて感じたのは今や国民の二人に一人が「がん」になり三人に一人が「がん」で亡くなる時代になって、国民の多くの方がもっと「がん」について知識や情報を求めておられるという事。特に、本やインターネットやマスメディアという媒体を通じた知識や情報ではなく、医療従事者を始めとした「がん」に関わったことのある生身の人間とコミュニケーションをとることによる知識や情報を求めておられるという事を確信しました。

つまりは、今後もこの学会が存続し、ますます発展して一人でも多くの一般市民の方に存在を知っていただき、その延長上にあるがん哲学外来カフェの様を集まりが日本各地で開催され一般市民の皆様にご利用頂けるようになることを切に望みます。

学会に参加していただいた皆様、スタッフの皆様にご心よりお礼を申し上げます。有り難うございました。

## がん哲学外来 市民学会第一回大会と 佐久開催に思う

にしくまもと病院  
在宅ハブセンター長

### 松本 武敏

今回の学会のおかげで、佐久に28年ぶりに行くことができました。熊本大学医学部五年の夏休みに、佐久総合病院の小児科実習で一週間泊まり込みをしたとき、何を勉強したかはよく覚えていないのですが、若月俊一先生の話聞き、夜は熱い思いを語り合いながら飲んでいて記憶が蘇りました。佐久で医師としての原点を見つめ直すことが出来たのは、佐久の皆さんが「いい病院は市民がつくる」を

実践して来られたからなのだなあと改めて納得した次第です。

がん哲学外来のシンポジウムについては、信濃毎日新聞の記事等でご紹介がありました。続いて青木裕子さんによる朗読は、「だいいじょうぶだよ ゾウさん」に始まり、穏やかな気持ちで耳を傾けることができました。福岡出身の青木さんが、九州と信州の風土の違いについてプログラムに書いておられるのですが、まったく同じことを熊本にいる私も思っておりました。

青木さんの素敵な文章を一部引用します。「人の言葉に耳をかたむけ、人のありように共感し、自分の心を開いて相手を受け入れる、そして相手を受け入れた上で、言

葉を送り返す。」柳田邦男先生が翻訳された絵本の朗読の時間に、がん哲学外来の真髓があったように思います（It is fine が「だいいじょうぶだよ」と訳されたのですね）。

医療や福祉の在り方は、地域性、文化性が大いなので、それぞれの地域ごとに智慧を出さねばなりません。賢慮が求められる時代に、第一回が佐久で開催されたことにより、大いなる学びがあったことに改めて感謝する次第です。ありがとうございました。



思いが溢れるワークショップ  
を見事に収める石田卓先生



「がん哲学教室」を熱く語る山田圭輔先生  
（金沢大学附属病院麻酔科蘇生科）



松本武敏先生、西村元一先生の名司会により  
会場と一体となったシンポジウム



柳田邦男氏訳の絵本の朗読  
軽井沢朗読館長 青木裕子氏による

# がん哲学外来 コーディネーター養成講座のご報告

平成24年9月22日



第2回がん哲学外来コーディネーター養成講座

## がん哲学外来 コーディネーター養成講座 の司会を担当して



信州大学医学部附属病院  
遺伝子診療部

櫻井 晃洋

第二回がん哲学外来コーディネーター養成講座は、(講座1)

がん治療の国内のトップリーダーによる「日本のがん医療の現状」と題した講演、(講座2) 県内病院の看護師、社会福祉士、介護支援員、さらに患者さんも加わったパネルディスカッション「患者さんやご家族と向き合っている」と、夕方から夕食をはさんで五時間近くもおよぶグループワークと全体討論、さらに(講座3) がん哲学外来研修センター運営委員長の北澤先生による総括と、異なるスタイルのプログラムが八時間以上にもわたって企画された濃密なものでしたが、まずは予想をはるかに超える多くの方々が参加されたということ、そしてその内容の濃さに、司会を担当した私自身が驚きの連続で、また貴重な学びの場になりました。

夜のグループワークでは、「がん哲学外来」とはなんだ? 「コーディネーターには何が求められるのか?」、私自身もまだ答えを出せないこんなテーマを、さまざまな背景をもつ大人が百人以上も集まって、夜遅くまで議論し続けましたが、その光景そのものが私の想像をはるかに超えていて、それが現実のことであることを何度か自分に言い聞かせなければならな

いほどでした。当日のあの空間は確かに周りから切り離され、一歩突き抜けていたのだと今になって実感します。

後日、私は「上医医國中医医民下医医病」という言葉をふと思いついていました。上医は国家を医(いや)し、中医は民(人)を医し、下医は病を医す、という中国の古い格言ですが、私の学生時代の公衆衛生の先生は病気を診るな、人を診る医者になれ、病気を作らない公衆衛生行政に関わるのはもつといい、という意識をされていた。今回の養成講座を通じて、この言葉は医師個人のことだけではなくて医療全体の思想のことでもあったんだと感じています。

私が医師になったころは病を医すことが医のすべてのように思えました。そうではなく全人的な医療をという考えを次第にみなが共有できるようになったものの、それでもまだまだ救われない人、渴き苦しむ人はいます。養成講座や市民学会で何人も人が話されていたスピリチュアルな痛みには対応できません。これではしよせん「中医」どまりです。日本人は宗教的な背景が希薄なために、こうした霊的な痛みを癒

すのが難しいという意見もあります。そうかもしれない。しかしたとえそうであったとしてもスピリチュアルな痛みを解消することはできる、それをがん哲学外来が示そうとしていると実感します。

がん哲学外来やメディアカルカフェは、予防医学とは別の視点での「上医」を実現するための新しい仕組みなのだと感じています。これは医療を変えるし社会を変える、まさに国を医すものになるはずですが、上医の実現は市民の力でしかなしえない、今回の養成講座と市民学会を通じて、佐久総合病院を作られた若月俊一先生の「医療の民主化」という言葉とがん哲学外来の歩んでいく道とが、私の中でひとつにつながったと感じています。

## 集うこと・語ること・見出すこと

千葉県 佃 志津子  
(社会福祉士・精神保健福祉士)

この度の養成講座で感じたことは、人が集うことの価値です。ファシリテーターとして参加させて頂いたグループ討議では、「がん哲学外来」の必要性や、コーディネーターの意義・資質について皆さんと考えました。前半の二時間は、各8名・16組で討議し、後半は、2グループ合同の16名・8組で論

点を整理の上、発表が行われました。

語りの相互作用から生まれるものは、とても興味深いものです。一人一人が様々な表現したものから共通点を見出し、言語化できることもあれば、他者との違いを感じることで自分の奥深くにある思いに気づくこともあります。習うのでも、与えられるのでもなく、自ら考え、感じ、語り、皆で生み出す、そのようなプロセスをお互いに、「がん哲学外来」の意義を各自が熟考するとともに、他者と共有すること、自分を知ること、の両方を体験する場となったのではないかと思います。参加された方々の内側には、どのような言葉が生まれ、響いているのでしょうか。あらためて、充実した内容の素晴らしい講座と学会の運営に尽力された方々に感謝いたします。



白熱するグループディスカッション

### 医療分野へ一歩踏み出す きつかけをくれた父と この養成講座に感謝

東京都 淡海 未絵

(会社員)

私は、昨年父をスキルス性胃がんで亡くしました。その前後で、いろんな本を読んだり、死生学にも興味が出てきてきましたが、日本でなかなか巡り合えず、中世のペストの伝染病から始まった「メント・モリ (memento mori)」（死を想え）についての講義を聴きにイギリスに行ったり、試行錯誤している中、有難いことに樋野先生との出会いがあり、今回参加させていただきました。死生学とか心のケアについてここまで特化した場に参加するのは初めてで、本当に参加できて心と知的欲求が満たされた感じがしました。

ガンのことを話してもいい場と  
いうのは家族の中以外にそうそうありません。同じ立場・共感ができる環境にすることで非常に居心地のよさを感じました。これぞメデイカルカフェの雰囲気ですね！有難いことに、父は在宅で亡くなりました。私は東京在住、父は大阪で、最期長くないと言われてからは、二ヶ月間毎週末新幹線や飛行機で帰省する度に、父がだんだん小さく弱くなっていく姿に悲しいけれどもしつかり見届けたい、介護をがんばる母を少しでも元氣

づけたいという使命感がありました。在宅医療のお話をされた宇都宮さんの発表が自分の父の在宅医療で最期を終えた経験とだぶつてうるうるが止まりませんでした。また、いろんなご経験をお持ちの先輩方や医師の方や看護師さんなどプロの方々にも出会うことができ、自分の今後を考える上でも本当に参考になり、参加してよかったと思います。

先生方より、ガンの最新の治療の情報も伺うことができ、薬の威力を知ることができ、今まで、副作用のきつい薬に懐疑的な私としては新たな気づきをいただきました。薬と共に、ガンと共に、いかにQOLを高めるお手伝いができるか、そして、そこに言葉がものすごく重要であるということを知りました。

いろんな方がおっしゃった一つ一つの言葉。どれも重みがありましたが、樋野先生の言葉はなんと温かく深い言葉だろうと心に染み入る言葉ばかりで感動しました。私もそうした人間力を高める努力をしたいとまだまだやる一杯あるなあと思うことに元氣が出ました。  
・・・養成講座受講後・・・  
悩んだ末にやっと先日会社退職の話をして、一二月からシアトルに行き、医療の道に進むための勉強を始めます。これからの道りは長し、試行錯誤の段階ですが、

樋野先生との出会い、この養成講座の受講が、私の医療分野へ後押ししてくれたきっかけの一つとなったことは間違いありません。先生方、受講生皆様に感謝申し上げます。V I V A !



畳の部屋で腰を据えて語り合う (小グループで)

### 寄り添うことの難しさ

福島県 石野 富江 (主婦)

がん患者の心に寄り添う。これがコーディネートタ養成講座の白熱した討論の結果達した結論に近いものだった。

佐久から帰って間もないある日、親しい友人のメールの中にさりげなく書かれた一文に私は少なからぬ動揺を受けた。「最近、あなたのメールは体調のことに偏り過ぎ」。あつ、これだったんだ！私は何故自分が「がん哲学」に

心を惹かれたのか初めてわかったような気がした。  
死に直面する恐怖、不安など日頃の心のゆれを意識せずに彼女へのメールに繰り返していたのだから。

長年の親友ではあっても健康な彼女に100%理解してもらうのは多分無理だろうなとどこかで感じつつも。がん患者と他者のこの微妙な間隙。これは患者と医者だけのものではない。強い絆で結ばれている筈の家族、友人、社会、いたるところに存在している。

この隙間を少しでも埋めていくには先ず患者自身が「がん哲学」の意味を理解し、救いを他者に求めるだけでなく自分自身の中にも見出すよう努力することが最も大切なことではないかと思う。

誕生間もない「がん哲学」が社会に浸透していくことによって近い将来、医療業界の思想、ひいては患者自身の意識の改革等を通じて、医療費の節減など根本的な問題にも関わっていくだろう。

### テツコ&GTC 養成講座に参加して

東京都 川野 隆

(会社員)

医療関係者でもなく、がんの患者さんやその家族でもない、私のようなごく普通の会社員が、どうして、がん哲学外来コーディネー



2グループが1つになって意見を話し合う

ター養成講座に参加しようと思ったのか。

樋野先生の「がん哲学外来」がメディアに取り上げられ始めたころから、その名称になんとなく惹かれるものを感じていた私は、機会があるたび講演会やシンポジウムなどに顔を出し、樋野先生のお話を拝聴しておりました。お茶の水メディカル・カフェで、先生とお話しする機会があったので、その場で話題にのぼった「がん哲学外来市民学会の大会」へ、「参加してみようかなと思ってます」と私が言うと、「コーディネーター養成講座にも参加してみるといいですよ。面白いから」と先生。がん哲学外来コーディネーターがなにものであるか、まったく知識のなかった私でしたが、先生がニコニコと優しい眼差しでおっしゃった、「面白いから」というあの言葉に、私の心は激しく揺さぶられたのです。それがコーディネーター養成講座へ参加した動機です。

で、参加した感想はというと、先生の言うとおり「実に面白い」ものでした。自分の人生に対する考え方が変わるほど面白い！と言ってもいいかもしれない。養成講座は昼から夜10時までみっちり行われましたが、医療関係者、患者さん、一般市民などの垣根を越えて、初めてお会いした方々と情報交換や議論を交わし、非常に濃厚で有意義な時間を過ごすことができました。参加者数一四〇名ほどの大所帯となり、準備・運営をされてこられた事務局の皆様方のご苦労に対しては、頭が下がる思いです。あらためて感謝申し上げます。

二人に一人ががんにかかる時代。かわり方に違いはあれど、誰もががんと向き合う、そんな時代に私たちは生きています。がんと向き合っているのかという問題は、医療だけにとどまらない深刻な問題。がん対策基本法・基本計画では「患者主体の医療」を掲げているけれど、現状の医療とのギャップは大きいともいわれています。患者さんの心に寄り添い、不安や苦悩を解消する手助けする、がん哲学外来やコーディネーターの役割は、その隙間を埋めるためにも重要であり、まさに、時代の要請」と言われる所以でしょう。医療の変革期ともいえるこの時代に、さて、私自身はいったい何ができるのか。

### がん哲学外来に入門させて頂いて

埼玉県 今井 康博 (医師)

「人は成すべきことがあるから、生きている」  
樋野先生の言葉の重みを噛みしめながら、コーディネーター養成講座終了証をいただいた身として恥ずかしくないように、人間力を養う努力をしつつ、私なりの答えを見つけていきたいと思えます。

「また明日」この挨拶のように日常生活において、明日があることを当然のことと考えている。当然のことと考えている以上、思考停止状態で哲学なんぞ生まれて来るはずがない。

しかし、癌と診断、宣告された患者様は、程度の差はあるものの自分の死について考えざるを得なくなる。今までの人生と今後の生きる事の意味を立場とともに考えざるを得なくなる。思考停止状態ではいられなくなる。そこに哲学が生まれ「がん哲学」が存在する。この二日間の研修で「がん哲学」への入門をさせていただいた私の感想である。  
私は、大病院の外科を辞めてから十数年、埼玉県の小さな病院で上下内視鏡検査を中心に癌を診断している。毎年、数十人の患者様を癌と診断し、最良と考える病

院へ紹介し手術。術後、当院外来で術後のフォローと必要な方々に点滴や内服での抗癌剤治療をしている。残念ながら終末期に至る患者様には入院でBIC (Best supportive care) で看取っている。診断や化学療法治療については大病院に負けない医療レベルと小病院ならではの機動力で迅速、正確、誠実を目標にそれなりに自信もある。しかし患者様に私の考える最良の医療を受けていただくことは可能でも、その医療の隙間ともいえる患者様個人の心のケアについては、必要性は感じながらも、遠慮がちに恐る恐る、出来れば触れたくないという態度で接してきたと言わざるを得なかった。

外来で「調子はどうですか？」と聞く際、身体の調子のことではなくして心の安静についてではない。たとえ心の不安をぶつけられても、ガイドラインやエビデンスのないことに「診断と最良の治療」がどうすれば出来るのか。わからないことはわからない。このわからないことへのヒントになるのではと思ひ、研修会と市民学会に参加した。  
一緒に養成講座と市民学会に参加してくれた癌サポーターナースが「この女性なら」と思われる患者様にがん哲学外来とメディカルカフェについて話をしたところ、彼女は即座に「食器洗いで何でもするから是非(カフェ)開いて

### 佐久メディカルカフェに通って

長野県 安藤 奈々 (記者)

ほしい」と眼を輝かせて答えてくれた。現在点滴の抗癌剤治療中で11月に手術予定である。手術が終わって元気になったら開催しよう。彼女のためにも準備しなくてはと考えている。  
人は言葉で考える。私は今回の養成講座と第一回市民学会で「がん哲学」と言う言葉を得て、医療の隙間に偉大なるお節介をさりげなく実行していけたらと考えている。

佐久市のメディカルカフェに通い始めて九か月が経つ。毎回話し合われるテーマは違うが、必ず全員が自己紹介をする。この時間がカフェの肝ではないか、と私は思う。  
がんと生きることのつらさ、しんどさ、かなしさは、きつとどこでも誰にでも話せるものではないはず。でも、カフェに集う人たちは皆、似た痛みを感じている。その安心感が訪れる人の口をゆつくりと開いていく。  
私も中学の頃、祖父をがんで亡くした。入院先にお見舞いへ行っただのはたった一回。生気のない顔の祖父に、私は言葉が見つからず、黙って泣いた。祖父も何も言わなかった。それが最後に見た祖父の



全体発表では、大グループになってまとめた内容を、個性豊かな代表者が発表しました。

姿だった。「笑った顔を見せられなかった」。カフェに参加した女性が一緒に泣いてくれた。心に隠していた後悔の記憶が少し明るくなった気がした。

九月には全国からがん哲学外来の関係者が集う第一回大会が佐久市で開かれた。「あなたは一人じゃないよ」。訪れた人はそんな言葉をかけられた気持ちになったのではないだろうか。病気は誰にとっても怖いものだし、時に哀しい。それでも寄り添う人がいれば、今日を生きていられる。その勇気をもらった日だった。

## 広がるがん哲学外来

福井県 吉川 千恵

(病院勤務)

去る平成24年9月22〜23日、「がん哲学外来コーディネーター養成講座」および「第一回 がん哲学外来市民学会」が佐久市にて開催されました。当院からも院長をはじめ、二日間で六名が参加させて頂きました。

当日は、樋野先生を中心に、全国に広がる「がん哲学外来」を実感し、その広がり宇宙を感じました。また「がん哲学外来」に携わってこられている方々が多数参加されており、各地の現状を直接伺える貴重な出逢いの場となりました。会場は熱い想いとエネルギーで満ち溢れ、議論が尽きませ

んでした。

皆さんの意識の高さに驚くと同時に、言葉や対話の大切さを痛感した二日間となりました。

今回のように行政、医療者、患者さんおよびご家族が一体となって共に考え、共に学ぶ市民学会が、今後も発展していくことを期待します。

当院は「心と体に優しいがん診療」を重点目標に掲げ、その核となるべくがん哲学外来、メデイカルカフェの運営に取り組んでおります。現在も試行錯誤で運営しておりますが、参加を通して、より患者さんやご家族の立場に寄り添った支援を行う為の大きなヒントを頂くことができました。このような機会を与えて下さった樋野先生、そして二日間運営して下さいました佐久の皆様により感謝を申し上げます。ありがとうございます。

## 「医療の隙間」の真の意味

奈良県 吉川 千佳

(社会福祉士)

今年勤め先の病院で「疾患を問わない緩和ケア」を地域の皆様提供しようとしてプロジェクトチームが発足し、私に養成講座参加の白羽の矢が立ちました。そしてがん哲学が何か分からないままに養成講座に参加しました。たくさんの講師の皆さんが「がん哲学」を軸

に講義され、ディスカッションなどプログラムが進むにつれてがん哲学がいかに大切に気づきました。参加者も医師や一般市民・がん患者さんなど様々で、その人達がそれぞれの立場・知識から発言し、刺激しあい、考えを深めていきました。

「生と死をどうとらえたらいい?」「がんと言われたが今生きている」「がんになったら全てを失うのか?」「死を背中に負いながら生きる」「がん患者が開放されるには?」

緩和ケアに携わっていないがこの時初めてがんを多面的に考えた気がしました。私は緩和ケアを提供する側でしか物事をみられなくなっていたのかもしれませんが、病院で勤めていると多くの方の最期を経験します。良い最期とは死という「瞬間」ではなくそれまでを良く生きたのち迎える一連の事だと思っていました。だけど、「よく生きる」と言っても襲い掛かる苦痛を軽減しなければ無理かもしれない。まだ続くと思っていた自分の命がそうでないかもしれないと分かった時によく生きると言われても、恐怖や衝撃は果てしなく大きく、無理かもしれない。そもそも良く生きるとは?がんに

なった事で感じる恐怖や衝撃や辛さ、それを抱えて生きる苦しみはがんではない者には想像する事し

しよう。

だけど、私達が想像し、対話し、共に過ごし、想いを理解しようとする事で患者さん自身が自己と向き合い、自分が今存在する事の意義を見出し、生きる事へ向き合えるお手伝いが出来ればと思えました。

がん哲学を知らなければ多くの患者さんを医療の隙間に突き落とすしてしまっていたかもしれせん。医療人として、人として大切な事を教えてもらいました。



講座2は患者と医療者が体当たりで本音を語り合った

## これからの

## ガン患者の居場所

大阪府 出口 孝明

(歯科医師)

第二回がん哲学外来コーディネーター養成講座を受講して思う。初日は九月二二日午後二時頃から『日本がん医療の現状』をテーマに最新のがん研究を基に新薬と治療法が紹介された。臓器(部位)、

種類そしてステージ(進行度)により生存(年数)率に違いがあり、今後の患者さんに対しての希望と期待されると共に、治療が困難な悪性新生物もある事に不安と絶望を感じた。

次に「患者さんやご家族と向き合っていること」がパネルディスカッション形式で紹介された。医療従事者と患者さん本人から各々の立場での本音を語る事により、考え方、接し方として話し方の相違から、お互いにガン細胞に立ち向かう(あるいは共存する)目的は同じでも、お互いの理解を共有する事で、明日への希望と治療に対する勇気、そして人として生きる力(人間力?)が生まれ、がんになる前より死を自覚しうることにより(人)生への意義を感じ社会生活への活力が新たに生まれる。その反面誤解(勘違い)する事もある。そしてその事が、不快感と不信感として不安感が生まれる事になる。医師への不満から不信、生きる事への絶望、そしてすべての事象への拒否により閉じこもり、閉塞した生活と、悪循環に陥る。私は思う。ほんの一言が、相手に与える影響は大きい。しかし、人の気持ちなんてはつきり分らない。特にがん患者さんの気持ちなんて、分かるはずがない。ただ、人の誠意は通じる。相手が、本当に患者さんの身になって言葉を掛ければそれは心に

通じ患者さんの心は開く。そこには、家族とか、医師とか、そして知人とか関係ない。そこにあるものは共感から生まれる事実の受け入れだけ、そこからその患者さんがどう生きていくか、どう暮らすかが決まるのではないだろうか。それにほんの少しだけ支えになる事がその患者さんにとって一番重要である。これは、自らがん患者であると共にごん患者さんの治療と関わる私自身が思う事である。

そして、最終テーマ『がん哲学外来コーディネーターの社会的ニーズと役割』をグループディスカッション形式で夕食(午後六時ごろ)を食べながら行われた。ここでは、がん哲学外来コーディネーターの資質・必要性、定義として役割など各グループに分かれて話され、発表会と質疑応答で午後10時過ぎに閉会した。各班には医師、看護師、社会福祉士、市民そして患者さんなどのメンバーが参加し、各々の立場から患者への提案方が問われた。そして、患者さんに対して同一の目線で、同じ立ち位置で、お互いに双方方向に必要がある、との見解に落ち着いたと思う。

い気持ちになる。しかし、治療を受け、検査を受け今まだ生きている。がんになり、死を実感(直面)し、生を楽しむ。

私は、この市民学会がその存在をまだ知らないがん患者の為に、一つの生き甲斐のツールになる事と共に、がん患者社会のバイオニアに発展する事を切望する。

### 心の解放区

#### —現代のオアシス—

埼玉県 井坂 由季子

(主婦)

ほぼ全員がボランティアであるにも関わらず、これだけの錚々たるメンバーが集まり、感動的な二日間を作り上げた。特に、佐久のスタッフの働きに想いつくのは「感謝」の言葉である。こちらから拝見している限りでは、まるで忍者の如く、的確にひっそりと正確に、そして優雅に物事を処理されておられた。実際のところは、神のみぞ知るであろうが、個人的な意見であるが、市民学会ではシンポジウムのシンポジストに市民や患者や患者家族が参加したならば、更に市民学会らしい学会になったのではないかと感じた。これは、第二回目以降の市民学会に期待するところでもある。

市民、患者、家族、看護師や医師、その他の医療関係者が寝食を共にして、夜を徹して、楽しく、議論を交わした。「陣営の外」に出て「客体的隣人観」から「主体的隣人観」を実践して下さったドクターやナースの方々、一般市民の私たちにきちんと耳を傾けて下さったプロフェッショナルの方々、真摯に率直な気持ちを分かち合って下さった患者や家族の方々の愛に溢れた養成講座は、まさに「Union's Power」を感じるひとときであった。



世界に広げよう! がん哲の輪

### 「愛」ある人々の中で

長野県 星野 昭江

(主婦)

敬愛して止まないH先生を、臓がんで亡くして七年になります。手術しさえすれば治ると本人も家族も私も信じきっていたのが、開

腹後、余命八ヶ月という冷たい宣告に代わりました。末期がん患者に治療法はないからと退院を余儀なくされ、自宅で衰弱の一端をたどり、やがて宣告通りの「いのちの期限」の日が来て、H先生は旅立たれました。

三年前の五月、東京の東久留米市に於いて「がん哲学外来」に出会いました。以来、樋野先生をお呼びして「クアハウス佐久」を会場に「がん哲学外来研修会」を三回開きました。地元のお年寄り達が熱心に学んで下さり、四回目は佐久総合病院のホールを会場に、市民公開講座として開催できました。

そして、一泊二日の第一回コーディネーター養成講座では、受講生と講師陣の熱い想いが集約され、佐久宣言として「がん哲学外来市民学会の立ち上げ」をみたのです。

ここ佐久地方の医療の偉人、故若月俊一先生(佐久総合病院)が遺した言葉に「病める人への愛の心」があります。ひとりの医療者とひとりの病者、そしてかたわらに寄り添う「愛」ある人々。がん哲学外来市民学会第二回大会と第三回コーディネーター養成講座に寄せられる期待には、大きなものがあります。

第一回の大会と二回目の養成講座の事務方として夢中で過ごしたここ数ヶ月ですが、温かい「愛」の心を希求し続ける人々の環の中にいる自分が感じられたことは、とても幸せなことでした。カウンセラーとして子供たちに限らない愛を注いだH先生のまなざしを、かたわらに、大会の事務方の仕事はどうにか務められたことも、感謝したいことのひとつです。

ひとりひとりが医療の隙間を埋め、  
支え合う社会の実現をめざして!

## がん哲学外来 市民学会 会員大募集!

がん哲学外来市民学会は  
どなたでも会員になれます。

年会費 3,000円

- ニュースレターの発行
- 大会・養成講座の会員価格による参加

お申込お問合せメール

info.shimingakkai@gmail.com

がん哲学外来市民学会  
第二回大会に向けて



東海大学医学部血液・腫瘍内科

第二回大会長 安藤 潔

次期大会長としてご挨拶申し上げます。まずは北澤彰浩先生、村島隆太郎先生、櫻井晃洋先生、片桐孝子様をはじめとする第一回大会実行委員会の方々のご努力に感謝するとともに、養成講座と大会の成功をお祝い申し上げます。収穫の時期を迎えた黄金色の美しい景色の中で私も豊かな二日間を過ごさせていただきました。

第二回大会は、下記のように東京での開催を予定しています。いずれにしても、第一回大会とは全く異なった景色の中での大会となることでしょう。毎年、全国様々な土地柄に根付いた「がん哲学外来」「メディカルカフェ」を巡り歩くのも楽しいかもしれません。今回の大会で「がん哲学外来」が医療従事者だけでなく多くの市民の期待を担っていることを実感いたしました。国民の二人に一人ががんに罹患するということは、誰もががんと無縁で生きることができないということなのです。そのこ

とに真摯に向きあおうというエネルギーを感じました。「市民学会」である所以ではないでしょうか。第二回大会もその思いを受け止めて実り多い大会となるように努力いたします。皆様のご協力をよろしく願いたします。

がん哲学外来を  
静思する



人間を動かすもの

岩手県立中央病院 加藤 誠之

社会学では人間を動かすものは欲求だという。人は、常に何かしらを求めているからだろう。マズローは、欲求には本能的な欲求から、高次の欲求まであることを指摘した。すなわち、欲求には、特定の場面での欲求もあれば、人生という大局を見て、追い求める高い次元のものもある。

人生を通じて人が追い求めるものこそ、人生の目的となる。樋野興夫は、「人生の目的は、品性の完成にあり」という。確かにそうだと云えるが、個人的には、この言葉が一人歩きすることは、ある意味、危険だと思う。人は各々死すべき一回限りの人生を生きていくが、期限つきの人生をひしひ

しと感じながら生きている人は少ないと思われる。さらに、人生の目的を慎思することは、人生の有限性を自覚することの延長線上にあるのである。この痛切なる背景を抜きにしては、この言葉の持つ真の意味は失われる。

がん哲学外来では、来談者は自らの生命、生きる意味に関して、深く心の中を探り、一方、向かい合う人間（樋野）は、自らの人生観を直視・点検する。この濃密な時間の共有自体が、素晴らしい体験であり、学びの場でもある。しかし、がん哲学外来では、もう少し踏み込んで話が進んでいくことも多い。その結果として、「人生の目的は、品性の完成にあり」という言葉が出てくるとすれば、これは他者に向けた二人称の言葉に見えて、実は、自らに向けた一人称の言葉でもある。自ら煩悶し、辿り着いた言葉のみが、真実の言葉となる。ナマの体験に裏打ちされた、生きて呼吸している言葉とも言えよう。個人的には、がん哲学外来が、他者の人生観を変えるような力、いわゆる「救済の客体から解放の主体へ」という転換を促す力は、言葉の持つ一人称での真実性によるものと考ええる。樋野は、「がん哲学外来は、誰にでもできるよ」と言う。恐らくそれは本当だろう。がん哲学外来に臨む人間に、自らの人生観・死生観が確立されていれば。

第3回

がん哲学外来コーディネーター養成講座

実行委員長 ● 佐久総合病院地域ケア科 北澤 彰浩

日時 / 2013年10月5日(土)・6日(日)

場所 / がん哲学外来研修センター

〒385-0046 長野県佐久市前山321-3

がん哲学外来市民学会第2回大会

大会長 ● 東海大学医学部血液・腫瘍内科教授 安藤 潔

日時 / 2013年7月6日(土)

場所 / 東京ガーデンパレス

〒113-0034 東京都文京区湯島1-7-5

お知らせ

募集要綱など詳しく決まりましたら、がん哲学外来市民学会公式ホームページに掲載いたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

がん哲学外来市民学会ホームページ <http://www.shimingakkai.org/>



がん哲学外来市民学会事務局  
片桐孝子

「ソクラテスの産婆術…」安藤 潔先生のご発言の中にこの言葉を見つけ、意味を改めてお訊ねすると「ソクラテスは哲学の産みの親と言われていますが、その哲学は弟子達との対話の中に表現されたものです。対話の中から産み出されるという意味で、ソクラテスの対話術を産婆術と言います。ソクラテスが対話の中から哲学を産み出したように、患者さんとの対話の中からもいろいろなものが出されていくと教えていただきました。がん哲学外来は現代の産婆術かもしれません。患者や医師、そして私達ひとりひとりが尊い存在として向き合い、語り合い、人生観を響かせ合う場があることはとてもステキなことです。市民学会&養成講座での学びを各地に持ち帰ってそれぞれの取組がさらに豊かになり、また次回大会と養成講座で学びを共有することを楽しみにしています。記念すべき市民学会創刊号は皆様の真心がギュッと詰まっています。ご尽力をいただいた方々から感謝を申し上げます。